

よきおとずれ

カトリック釧路教会だより

第 19 号 主のご降誕（2020 年 12 月 25 日）発行



人と人が離れる中に

洗礼者ヨハネ 内藤 孝文 神父

入院している信者さんの家族から、「病者の塗油」の依頼の連絡があり、入院先の病院に行った時のことです。既に主治医からの許可が下りていたのですが、病室に入るまでが大変でした。まさに「たどり着く」という感じでした。ロビーにある「面会専用」という場所で、先ず体温の測定、住所・氏名・連絡先の記入、必要なもの以外の持ち物の預かり、スリッパに履き替え、看護師が迎えに来るまでその場で待機……。手指消毒は必須。

看護師先導でようやく病室にたどり着いたら、患者の身体への接触はなるべく控えて下さい。時間は短くお願いします……。コロナ禍の病院の姿を垣間見ました。家族の面会でもいろいろと制限があるとも聞きました。

面会の難しさは病院だけではなく、どこの老人ホーム、グループ・ホームでも抱えている問題であると聞いています。

渡邊神父様が入院した時も同じでした。病室に入れたのは入・退院時だけ。他はナース・ステーションまでで、看護師を介しての本人とのコミュニケーションでした。

新型コロナウイルスは、人と人との距離を引き裂いています。でもそれは、コロナが悪いのではなく、コロナによって人の心の中にある、あるいは社会の中にある、何とも

言えない不安や恐れ、そこから生じる目に見えない「隔ての壁」が目に見える形で現れているのかもしれない。3つの密を守りましょう。5人以上や2時間を超える飲食や、距離の取れない長時間の会合はやめましょう……。人と人との距離が離れていきます。そこに残るのは孤独（感）です。

このような中で私達はクリスマス・主の降誕を迎えます。イエス様は、ヨセフ様へのそ



の誕生の予告の時、「インマヌエル」、「私たちと共にいる神」と呼ばれました。また、神様が、その救いの計画を実現すべく、イスラエルの祖先、アブラハムを選び出された時、自らを、「共にいる神」と自己紹介しました「私は、あなたがどこに行っても、あなたと共にいる」と。

イエス様も、この世を去る時、「世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」と言い残しました。

人と人との距離を離れ、孤独感を抱いてしまうそんな中にイエス様は私達ひとり、ひとりに向かって語り掛けてくださいます、「あなたと共にいるために、来た」と。



渡辺神父様からのお便り

主の平和

皆さん、こんにちは！ご心配かけています。たくさんのお祈り有難うございました。

今回は肺炎の治療と肺に水が溜まっていたのを抜く手術がありました。ほぼ、ひと月の入院となりました。水を抜くのに穴をあけたので、そこが痛くておまけに複数の点滴が一日中なので身動き出来ず寝返りもできず、イエスの十字架上のお苦しみに思いを向けました。病院食があわず、トラウマになりました。面会謝絶のため、だれにも会えず孤独を味わいました。そんな中、医療者たちは親切でした。園児の母親が勤めていたので彼女がいるとほっといたしました。看護師の一人とは、魂の話もできました。

ともかく、自分の弱さや脆さにいやというほど直面させられた入院生活でした。また、皆さんのあつい祈りも感じた日々でした。

皆さんとミサを捧げられなくて心苦しいのですが、今しばらく気力、体力の回復に向けて歩んでいますので、待っていただきますように！

ヘルマン 渡辺 義行 神父

中標津教会から

「神に感謝！」を合言葉に

マリア・ゴレッティー 船田 由江

我が家では何かいいことがあった時、「神に感謝だね。」が合言葉です。

自分の力を過信することなく、全ては神様の力によるもので何度となく助けられてきました。

「神様は、必ず力を貸してくださるから、祈りと努力を忘れないで。」と娘たちに話



しています。

『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』（ロバート・フルガム著）という本を以前読んだことがあります。私は、中標津カトリック幼稚園に4年通いました。その時の園長先生は、マウリリオ・ラザロ神父様で、先生は菊池美恵子先生でした。幼稚園で習った大切なことばは、「こんにちは・ありがとうございます・ごめんなさい」お祈りと大切な言葉は、今も忘れることのない、神様からのお恵みです。

コロナ渦中にあっても、神様に感謝すること・祈りをする事・互いを思いやることを忘れずに過ごしていました。

コロナがやや落ち着き、御ミサが再開し教会で信者の皆さんと祈りができた時「神に感謝！」、神父様が中標津教会に来てくださることに「神に感謝！」、日ごとの糧と健康に「神に感謝！」、あたり前だと思っていたこと全てが、神様のお恵みだったと改めて気付きました。

コロナが流行る前は、中標津教会でのミサを終え、釧路に帰る神父様との1時間半の車中の時間は、恵みの時間でした。一緒にロザリオを唱え神様の愛を学び、悩みを聞いていただき、修道院の大きな十字架のイエズス様に感謝と祈りをしていました。素敵な恵みの時間にも「神に感謝！」。

未だ終息のめどがつかない日々が続いていますが、感謝と祈りを大切にしていきたいと思っています。



中標津教会庭のルルド

路上生活者と過ごした冬

アシジのフランシスコ 持田 誠

毎年、待降節に入ると、大学院生の頃の冬を思い出す。20年ほど前の、1990年代末期のことである。

長引く景気の低迷を受けて、1998年の秋には北海道拓殖銀行が経営破綻。道内に限らず、全国で失業者が大量に発生していた時代であった。

この頃、それまでは北海道には存在しないと言われていた路上生活者、すなわちホームレスの姿が、札幌市中心部に見られるようになっていた。しかし、当時、まだ国も自治体も、札幌における路上生活者の存在を認めていなかった。公的支援の対象となっていなかった路上生活者は、氷点下の札幌市内で、日中は大通公園や札幌駅などの各所に散らばり、夜間は地下道の入口のわずかな隙間などを利用して、厳しい寒さを凌いでいた。

こうした現状を憂慮した、北海道大学教育学部の教員と学生が中心となり、「労働と福祉を考える会（労福会）」が結成された。彼らは精力的に札幌の路上生活者の実態を調査。社会学的な調査研究と並行して、炊き出しや銭湯入浴券の配布など、路上生活者支援の活動を行なうとともに、札幌における路上生活者の存在を初めて行政に認めさせた。

当時、同じ北海道大学の農学部で大学院生活を始めたばかりだった私は、メソジスト系のプロテスタント教会である救世軍の活動に参加していた。救世軍もまた、伝統的に路上生活者支援を行なっている。札幌にも路上生活者がいると知った北海道連隊札幌小隊は、大通公園で炊き出しを行うことを決定。私もその炊き出しの活動に参加した。また、労福会との橋渡しも行うことになり、北大で行われた会合へ救世軍の小隊長と共に出席したりした。



不景気な世の中とは言え、市街地はクリスマスの飾りや音楽で溢れている。しかし、路上生活者の暮らしは、そうした華やかな空気とは無縁だ。調査の結果、札幌の路上生活者の多くは、本州で仕事を失った人たちとわかった。冬場はすすきの繁華街で、除雪の仕事を請け負うなどしながら日銭を稼ぎ、命を繋いでいた。

私は、研究の合間を縫って、昼間は各地

に散らばっている路上生活者を探しては炊き出しのビラを配ったり、労福会の調査に参加したりした。夜は踏み固められた雪でガチガチの大通公園に、カレーライス鍋を持ち込んで炊き出した。救世軍の小隊長はまだ若い人だったが、食事をする路上生活者から熱心に話を聞いたり、相談を受けたりしていた。会話のなかでは、不思議と信仰の話はしていなかった。しかし、食事の終わりには必ず「お祈りしています」と静かに口にする姿が印象に残っている。

通い詰めるうち、路上生活者の中に顔見知りもできた。「なんでこんな事してんの？」と聞かれることもあったが、うまく答えられなかった。

12月24日の夜、小隊で短めの夕礼拝のあと、炊き出しに出た。いつもの食事の他に、携帯用カイロをつけて配付した。路上生活者の一人がニッと笑い、「神様はいるのかもね」とこたえた。なぜか私は衝撃を受け、逆に神を確信した。未だにその笑顔を忘れない。新型コロナウイルスが猛威を振るう時代。新しい失業の時代が到来している。今日もどこかで誰かが、路上生活者に手を差し伸べていることだろう。いまの時代に私が出ることにはなんだろうか？私は救世軍人にはならずカトリックとなったが、いまでも年末、社会鍋をはじめとした救世軍の活動には、心を寄せている。

共に祈り、できることをしたい。



安田 恁平 氏画（厚岸在住）

結び目を解く聖母マリアの祈り

聖母マリア神の臨在に満ちた方

あなたはご生涯を通じて、まったく謙遜に御父のみ旨を受け入れ 悪魔さえもあなたを罨や誘惑に陥れることはできませんでした。

あなたはすでに息子イエスと結ばれ、私たちのすべてのもつれを 解いてくださり、単純かつ忍耐強く私たちの人生に絡み合った結び目をどのように解くのかを身をもって示してくださいました。

あなたはいつも私たちの母として、主イエスと私たちを結ぶ絆を 示してくださいます。

聖母マリア 神の母 私たちの母

私たちの人生のもつれ、結び目を母の心で解いてくださるあなたのみ手に委ねます。私たちを苦しみや不安から解放してください。

あなたの取り次ぎによって、あなたの模範に倣うことによって私たちを悪から解き放ち、私たちと神との交わりを妨げる結び目を解き、不安、過ち、誘惑、すべてのものから解放してください。

あらゆることのうちに主イエスと出会い、主に心をとめ、兄弟姉妹のうちに、いつもイエスに仕えることができますように。アーメン



「心のともしび(tomoshibi.or.jp)から

編集後記

主のご降誕おめでとうございます。

11月22日付のカトリック新聞「声」欄に掲載された受刑者の方からの投稿に胸をうたれました。9月に帰天されたチェノットゥ大司教とやりとりされていたこと、昨年、大司教様を通して教皇フランシスコへ紹介され、教皇様からロザリオとお手紙をいただいたこと、また菊地大司教からいただいたお手紙の「キリスト者は罪を犯さないこと以上に、罪から回心することに重きを置きます」という言葉に救われたこと、そして、チェノットゥ大司教様が教皇様とつないでくださった証であるロザリオで世界平和のため、弱者のために祈りますと書かれていました。待降節を前に、この記事が私の心を明るく照らしてくれました。

私もまたこの投稿者のため祈りたい。感謝をこめて…。(M.I)

カトリック釧路教会 <https://kushiro-catholic.cloud-line.com/>

〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10

TEL 0154-22-5823 FAX 0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会